

シ、ヤ 此大愁歎に親友の死といふことが加はつたなら、ほゞ人をして愀然たらしむるに足るだらう。

ヒボリ

あの男を氣の毒だと思はないやうなら、わたしを情知らずだとおつしやい。

ピラマ

「あゝ、造化よ、何とておぬしは獅子なぞを造りをつたぞ？ 獅子あれば

こそ此方の戀人どのは盛りの花を散らされたわ。あの君こそは又とな  
い微妙い美人であるものを……いや…… あつたものを、此現し世に  
生き存へて、いとしがり、いとしがられ、いそぐとしていまされた微妙  
い美人であつたものを……さア、涙よ、搔亂せ。やい、劍よ、ピラマスの  
乳首を切れ。むゝ、その左の乳首をこそ、心の臓の跳る其左の。 (と自ら  
乳の下を刺して) 斯うして吾等は死ぬるのちや、かうして、かうして、かうし  
て。 もう吾等は死んだのちや。 もう吾等は脱出したのちや。 吾等の魂  
は最早空中にゐる。 太陽よ、光を失くせい、月よ、とツと、去ね……

月役 入る。

さ、死なう、死々々々々々。

ピラマス 死んでしまふ。

デメト 四々々々といつてるけれど、二つだけの價值もありやしない、てんで奴一人ツきりなのだから。

ライサ

一だけの價值もないよ、死んじまつたのだから。 奴は零だよ。

シ、ヤ

外科醫者の手に掛けたら蘇生するかも知れん。 さうすりや、人間並にや扱

へないまでも、小馬一ぐらゐにや當るだらう。

ヒボリ

どうして月が入つちまつたんだらう、シスピが戻つて来て戀人を見つけない

けりやならないの？

シ、ヤ

星明りで見附けるんだらう……あゝ、あそこへやつて来た。 彼女が歎くの

が此劇の結局だ。

シスビ又出る。

ヒボリ あんなピラマスが死んだからって、よもや長々とは歎いちやりますまいよ。白は短いでせう。

デメト 秤皿が卵の毛でも傾ぎませうよ、あのピラマスと此シスビとを權ることになると。彼男が男子だといふのも勿體ないこつてすが、此れが女だてえのは、いやはや、情ないこつてす。

ライサ もう死骸を見つけました、あの艶麗な目で。

デメト そこで、其白に曰く……

シスビ 「え、眠てお在かえ？ え、死んでかいな、愛しい戀人？ おゝピラマス殿、起きてたべ！ 物いうてたべ、物をいうて。一言もおしやらぬな？ 死んでかいな、死んでかいの？ いとしい其眼も最早墓地の中に埋れにやならぬ。この百合色の口も、この櫻實の鼻も、この黄色の九輪櫻の

頬も最早亡い、最早亡い！ 戀人たちよ、泣いてたもれ！ 目は韭のやうに綠色であつたものを。おゝ三姉妹よ、さ、來う、乳汁のやうに白い手を血汐の中に浸しをれ、戀人の玉の緒を鉄み切りをつたのは汝らの所爲ぢやゆるるに……舌よ、何にもいふな。忠實な劍よ、さ、さ、妾の胸をば血汐に染めい……

自ら胸元を短劍にて刺す。

親しい人たちよ、さらばく。かうしてシスビは果てまする。さらば

シスビ 死す。

シ、ヤ 月と獅子だけが残つてゐて、あれらが死骸をかたづけろのだな。

デメト さやうです。石牆もゐます。

ポトム (此間答を聞きて突然立ち上りて) いんにや、間の隔になつてゐた石牆ア、あれア最

早毀れッちまひました。……これから閉場詞イ御覽に入れますかね、で無くば、わしらの仲間の者二人で以てバーゴマスク踊るだが、それ聴つしやるかね？

シ、ヤ

閉場詞は止して貰はう、此劇にや分疏は要らんから。分疏にや及ばんよ、俳優は悉皆死んじまつたんだから、非難のしやうがない。が、もし此作を書いた作者がピラヤスの役をして、さうしてシスビの靴下縮で首を縊りでもしたら、それこそ好い悲劇だつたらう。いや、實際、面白い、中々よく出来た。が、そのバーゴマスクといふのを見よう。閉場詞は止してくれ。……

これにて役者連又出て来りて道化踊一くさりありて收まる。

深夜鐘の鐵の舌が十二時を報じた。戀人たちよ、もう寝みなさい。もうそろく妖魔時だ。明朝は、今夜夜深をしたけ眠過しさうだ。此たはでもない劇が、それでも、夜の足の緩いのを紛らしてくれた。一同お寝み



なさい。一週間は此祝ひを續けて、毎晩盛な宴會を催し、いろく新し面白いことをさせよう。

シ、ヤス、ヒポリタ以下一同入る。空舞臺になると、パツク手に帯を持って出る。

パツク

飢えた獅子めの唸る頃、

月に狼の吠えるころ、

どえらい仕事に疲勞れて

眠い農夫は鼾かく。

消えさうな篝の燃木が光り、

キヤア〜梟がキヤア〜啼いて、

枕の擧らぬ不幸な患者に  
 死装束をば思ひ出させる。  
 今こそ墓所が皆口開いて、  
 お堂の方へと幽霊どもが  
 揃つてぞろぞろと迂り行く。  
 三體具足のヒカトの神の  
 二頭立馬車と足並比べ、  
 太陽が降りや逃げるが、  
 暗くなりや出かけ、  
 夢と同じに夜中を我世に、  
 戯けて浮かれる妖精よ、われら。  
 鼠一疋騒ぐな今宵、

めでたい此家の戸背の塵を  
 掃除するのが吾等の役目。

と言ひながら跳れ廻るやうにして室の掃除をする。  
 此途端にオペロン、チテーニア、其他の小妖精ら出て来る。

オペロ 館の中がまだ薄明るいけれど、もう火は消えかゝつて眠さうな様子をしてゐる。さア、妖精どもは一同跳廻れ、荆棘から鳥が飛ぶやうに。さうして予が音頭を取るから、それに従つて歌つて、軽く踊れ。  
 チテー まづ、お前さん、請でお歌ひよ、一言々々に節を附けて。一同が手を取り合つて、靈妙な聲で歌を唱つて、此家を祝福してやりませう。

一同聲を揃へて歌ひ、やがて總踊になる。よき頃に

オペロ さア、これから夜明までは、めいめい此館の中をぶらつき歩かうせ。  
 お前と予は、第一等の花嫁の寢床へ往つて祝福してやらうよ、其床で懐胎

して生んだ子供は、いつまでも運が好いことにしてやらう。それから三組とも、其白髪まで愛情が滲らないやうに、又痣だとか、兎唇だとか、癩だとか、其他生れるや否や人に蔑み嫌れるやうな、自然の汚點ともいふべき人並ならぬ可厭目章が、かりにも其子供らの身には生まれつかぬやうに、めいめい手を別けて、此野の露で以て、それぐの寢臺を淨め、且めでたい平和が此館の中に満ち溢るゝやうに祝福してやれ。さうすれば、其祝福された此館の主は、永久に安全に暮すことになる。馳けて行きな、ぐづくしてゐるな。夜が明けると、又二同一しよになるんだぞ。

オベロン、チターニヤ及び従者ら皆入る。パツクだけ残る。

パツク

(観者に対して) もし私ら影坊師どもが、御覽に入れましたものが御意に叶ひませんでしたなら、どうかあれは一寸此處で御一睡の間に御覽じた夢だと思召して下さい、さうすれば、御機嫌が治ります。脆い、たはいもない當

狂言は、徒の夢同様のものでごさいますから、どうぞお叱り下さいますな。お赦免下さいますれば、おひく改良いたします。私パツクめは正直者でございますから、もし幸ひに蛇の鳴聲を頂戴しないで済みますれば、今に大改良を御覽に入れます。でございませんでしたら、パツクは虚言者だとおつしやいまし。では皆様、御機嫌ようお寝みなさいまし。お最下下さいますなら、お手を戴きたうございます、ロビンめが必定お報いを致します。

パツク 入る。

眞夏の夜の夢正誤表

頁	行	誤	正
七三五	五	亡くしてねえで	亡くしねえで
一〇二四	四	馬鹿なア者	馬鹿アな者
一五一七	七	指で輪を作へて	指を三本出して

眞夏の夜の夢(完)

大正四年十一月廿五日印刷  
大正四年十一月廿八日發行

正價 金壹圓參拾五錢

(製複許不)

譯者 坪内雄藏  
 發行者 荒川信賢  
 發行者 坂本嘉治馬  
 印刷者 渡邊八太郎

發行所 早稻田大學出版部  
 合資會社 富山房

→[刷印社會式株刷印清日]←



357  
127



終

